

## 新時代ロシアのアカデミー詳解辞典

—— 伝統の継承・発展と迷走 ——

源 貴 志

## はじめに

本稿は、ソビエト連邦解体（1991年）以後におけるロシア語詳解辞典の編纂・刊行の流れを、学藝史の観点から概観することを目的とする。新旧辞書の具体的な辞典項目を語学的な観点から比較・検討することは、今回紙幅が許さないで、別の機会を俟つものとする。

昨年（2008年）末、モスクワで、「21世紀のロシア語辞書編纂史」というタイトルの高等教育機関向けの教科書が刊行された——著者は、マリーヤ・アレクサンドロヴナ・ボブノワ<sup>(1)</sup>。ソビエト時代から科学アカデミー編纂物の出版に当たってきた〈学術〉〔«Наука»〕出版社、ならびにソビエト連邦解体以降、多くの学術出版物の発行を行なっている〈フリントア〉〔«Флинта»〕出版社の、共同の出版物である。

内容を簡単に言えば、21世紀におけるロシア語辞典の回顧的編纂史であるが、以下に述べるごとく、いくつかの顕著な特徴を有する。

第一の特徴は、その扱う期間の短さである。「21世紀の」と言っても、この本の刊行までに、この新しい世紀はまだ8年を閲していないのである。ロシア語の辞書編纂史〔ロシア語の表現としては лексикография という語が用いられる〕については、これまでも類書が何冊か出されているが、このような短い期間を対象としたものはほかにない<sup>(2)</sup>。

これには、まず背景として、ソビエト連邦解体以後、ロシアの出版界全体において刊行点数が増加しており、そのなかでとくに、いわゆる参考図書——すなわち辞書・事典類の刊行点数が非常に増加している事実を挙げなくてはならない。通常、一般の出版物よりも手間暇がかかると考えられる辞書・事典類の刊行ラッシュが、十数年も継続しているということは（理由はいくつか考えられるが、本稿では触れない）特筆すべき事実であろう。そして、21世紀に入ってから、わずか7年あまりの短日月においても、整理・概観するに足る点数のロシア語辞典が出ている状況がある。

もっとも、ここで、ボブノワの「21世紀のロシア語辞書編纂史」の第二の特徴に触れておかなくてはならない。と言うのは、本書がロシア語のいわゆる詳解辞典〔толковые словари〕のみではなく、各種の特徴ある辞典類を多数扱っているからである。本書が扱っている辞典の種類を

目次に沿って列挙しておく。

詳解辞典〔Толковые словари〕外来語・外国語辞典〔Словари иностранных слов〕古語・廃語辞典〔Словари устарелых слов〕同義語・反義語・同音語・同根語辞典〔Семонимические словари〕熟語辞典〔Фразеологические словари〕文法辞典〔Грамматические словари〕造語・派生語辞典〔Словообразовательные словари〕用法辞典〔Словари правильности устной и письменной речи〕複合辞典〔Комплексные словари〕作家語彙辞典〔Словари языка писателей〕実験的辞書編纂〔Экспериментальная лексикография〕（個人名辞典〔Словари собственных имен〕会話エチケット辞典〔Словари речевого этикета〕等を含む）<sup>3</sup>。

この目次立ての、〈詳解辞典〉以外の項目に該当するものも含めるならば、21世紀に入ってからに限定しても、優に、整理・概観を必要とする数を満たしているわけである。

以下、本稿では詳解辞典のみを対象とし、ソビエト連邦解体（1991年）後のロシア語詳解辞典の編纂・刊行の流れを、学藝史の観点から概観する。そこで、ここに紹介したボブノーワの著書が取扱う期間（2001年～2008年）については、その記述を検討しつつ、ボブノーワが扱っていない辞書については、独自にコメントするものとする。

## 1. アカデミー大辞典の事業継続

**ソビエト時代の詳解辞典** ソビエト連邦解体以後のロシア語詳解辞典の刊行事情を概観するまえに、ソビエト時代までのロシア語詳解辞典刊行史を確認しておかなくてはならない。これには日本語で書かれた手軽で有益な解説が、ナウカの「窓」別冊にあり<sup>4)</sup>、筆者にもアカデミーのロシア語辞典の編纂の歴史を追った一文<sup>5)</sup>があるが、上記のような叙述の都合から、ここではボブノーワの挙げているもの<sup>6)</sup>を列挙するにとどめておく。ボブノーワが挙げるのは、20世紀中の刊行で、かつ、完結している、という2つの条件を満たしているものだけである。

1. アカデミー大辞典（1948-1965）17巻／2. アカデミー小辞典 第1版（1957-1961）4巻／3. 同 第2版（1981-1984）4巻／4. ウシャコーフの辞典（1935-1940）4巻／5. オージェゴフの辞典（初版1949）1巻／6. オージェゴフとシヴェードワの辞典（初版1992）1巻

これらはいずれも、18世紀末以来のロシア・アカデミー辞典の系譜に連なるものであるが、これにダーリの辞書（ソビエト時代にも、第2版が複数回復刻されている）〔Даль В.И. Толковый словарь живого великорусского языка. 2-е изд. СПб.; М., 1880-1882〕を加えれば、20世紀の80年代まで、すなわちソビエト時代までの、完結したロシア語詳解辞典を網羅しているものということができる。

これらのうち、4., 5., 6.ならびにダーリの辞典については、ごく最近（すなわち、ボブノーワの著書の刊行後）に動きがあったので、4., 5., 6.についてはのちほど、ダーリについては別の機会に扱うこととし、まず1.の、アカデミー大辞典の編纂・刊行についてその後の経緯を見ておく

ことにする（以下、各辞典に言及する場合には、稿末のリストにしたがって、大辞典第1版[BAC: 1948]のように表記する）。

**大辞典新版の杜絶と出直し** 1948年～1965年に刊行された<sup>(7)</sup>アカデミー大辞典第1版は、1789年～1794年に刊行された最初のアカデミー辞典の正統を継ぐもので、かつて完結したロシア語辞典のなかで、他を圧して規模の大きい近代的辞書であり、現在でもロシア語辞典の頂点にあると言えるものである。

しかし、完結後多年月を経たため、ちょうどソビエト連邦解体の年に当たる1991年に第2版[BAC: 1991]の刊行が始まり、全20巻、収録語数13万5千を予定していたが、1994年までに6巻(5冊)、全体のおよそ3分の1弱〔アルファベットの3(ゼー)の項まで〕を出して杜絶した。

20世紀末——1990年代は、体制変換という、未曾有の社会的変化に遭遇したわけで、多巻物の辞書が一貫性を保ちながら刊行を続けるのはたしかに困難な時代であった。

そして10年後に新しいアカデミー大辞典[BAC: 2004]があらためて第1巻から出発しなোসることとなった。空白の10年と、第1巻からやりなোসることになった事情について、ボブノーワの指摘するところを見ると、この時期に、ロシア語の語彙構成に大きな変化が生じたのは言うまでもないこととして、既存の語彙についても、綴りやアクセント、発音についてまで評価をあらため、そのために新規に辞書を出しなোস必要が生じたのだと言う<sup>(8)</sup>。

この点については、ほぼ同様の説明が、当の新・大辞典[BAC: 1994]第1巻の序文にも現われている。だが、この序文も、刊行杜絶と出直しについて、それ以上のことを述べていない。それどころか、新しい辞書が出るからと言ってすべてが新機軸というわけではないし、そもそも、〈新機軸〉なるものが辞典編纂上どういうことを意味するべきか厳密な定義があるわけのものではないとまで述べ、新辞典の〈新しさ〉に触れようとしない<sup>(9)</sup>。序文全体のトーンも、この新しい辞典の内容が、18世紀末以来のアカデミー辞典の伝統を受け継ぐ正統であることを説明するものであり、革新性よりも継承性を強調するものである。

それに対して、まだしもボブノーワはこの辞典の〈新機軸〉を、以下のように4点まで挙げているのだが<sup>(10)</sup>、いずれも、せつかくに全体の3分の1近くまで進んだ辞典の刊行が止まり(あるいは止められ)、最初から出直すことになった事情を充分説明できるものとは思われないのである。

**新・大辞典の新機軸1** ボブノーワが挙げる新・大辞典[BAC: 2004]の新機軸の第一は、「これまでのアカデミー辞書よりも」対象とする期間が長いということである。しかし、〈ロシア語〉の出発点をプーシキンに置くアカデミーの辞典の〈伝統〉は変更されていないから、要するに、今回の刊行開始までに10年の時間が経過したために、〈ロシア語〉の生涯も21世紀に突入したというだけのことに過ぎず、それは言わば、〈自然増〉である。

**新・大辞典の新機軸2** 次にボブノーワが挙げるのは、辞書の規模、と言うよりは、収録語数である。新しい辞典[BAC: 2004]は15万語を収録するという。杜絶した辞典[BAC: 1991]の方

は13万5千語である。1割強の増加であるから、たしかに無視できない変更であると言える。

しかし、一般に10万語を超えれば充分に大辞典としての資格は備わるものであり、それを超えて数万語の差が、どれほどの実用性を持ち、大辞典としての価値を増すことになるものであるかは疑問であろう。

そもそも、新・大辞典〔BAC: 2004〕の序文には、高らかに、「アカデミー大辞典は規範辞書である」ことが謳われている。かつて拙論<sup>12</sup>において、ロシアのアカデミー辞書の編纂方針が、その長い歴史のなかで、「規範辞書（“正しいロシア語”を提供する）」と「総体辞書（“ロシア語の豊かさ”を記録する）」とのあいだで幾度も揺れ動いてきたこと、そこでは単に〈正しさ〉を採るか〈豊かさ〉を採るかということばかりではなく、通時的（古語を入れるのか、新語をどこまで採録するのかの問題）にも、共時的（標準語に対して、方言、俗語、雅語、術語等をどこまで入れるのかの問題）にも、それぞれ、局限方針と拡大方針とのあいだで揺れが生じていることを論じた。

ところが、ここでボブノーワは、新・大辞典〔BAC: 2004〕の1割強増加について、術語、方言、俗語の収録を言い、「すでに一定の社会化の過程を経、十分に流通段階に達しているもの」<sup>12</sup>との限定付きながらも、かなりの量の新語を入れているという拡大方針を説明しているのである。変化の激しい時代であるからこそ（とくに経済、情報、国民生活の分野において）一旦の刊行杜絶があったのであるから、新しい語彙への対応が行なわれるのが当然であるが、「規範辞書である」ことを信条とし、しかも完結までに数年から十数年を要する大辞典が、この変化の激しい時代に、どのような基準で新語を採録するのか、学術的な検討を経た〈新機軸〉を示すことなく、上記のような一般的な説明で済ませていることには不満を感じざるを得ない。一方で、現在までに、新語辞典、外来語辞典、術語辞典等が、出版物としても、ネット上でも多数発表されているのであるから、なおさらである。

そういう状況のなかで、新語がどの程度、「1割強」のなかに占めているのかはともかく、いづれにしる、それはやはり〈自然増〉の域にとどまるものと言えるだろう。

**新・大辞典の新機軸 3** 第三に、ボブノーワが新機軸として挙げるのは、各単語・熟語に対する文法上・文体上の標示の強化ということである。文法上の標示はともかくとして、文体上の標示の強化ということは、とりもなおさず、辞書としては規範性を強めるということ意味する。「この単語はもう古い」とか「この使い方は口語的だ」とか、辞書が指示をするのである。この点も、過去のアカデミー辞書編纂のうえで方針の分かれてきたところである。

この点で顕著に対照的であるのは、20世紀に編まれた2つの4巻本辞典で、ウシャコーフの辞典〔Ушаков: 1935〕が文体標示に積極的なのに対し、アカデミー小辞典〔MAC: 1957〕〔MAC: 1981〕は、文体標示を極力抑え、できるだけ多くの文学作品からの例文を、できるだけ長い引用で豊富に読者に読ませ、読者にニュアンスを自得させる方式を採っている。

新・大辞典 [БАС: 2004] が、従来の大辞典 2 種 [БАС: 1948] [БАС: 1991] (とくに第 2 版 [БАС: 1991]) と較べて、文体標示のうえで実際にどの程度強化されているのかは、2 種の辞典の実例をじっくりと対照考勘して見る必要があり、その詳細は他日に譲らざるを得ないが、概して見たところでは、それほど差が生じているとは感じにくい。

**新・大辞典の新機軸 4** 第四の新機軸としてボブノーワが挙げているのは、例文資料の見直しということである。すなわち、レーニン、スターリン、カリーニンなどの著作が排除されたというのであるが、それは第 1 版 [БАС: 1948] との比較の話であって、もちろん、第 2 版 [БАС: 1991] との比較の話ではない。

そのほか、単語項目の構成についても解説を加えているのが——この辞典についてのみではない——ボブノーワの著書全体に一貫した工夫である。この辞典については、用例のあとに、その単語が最初にどの辞書に収録されたかを記載 (語形に異同がある場合にはそれぞれの形の初収録情報を併記) し、さらに一部外来語等の語源説明を註記している点を特記しているのだが、これもすでに大辞典第 1 版 [БАС: 1948] において確立されたスタイルであり、やはり新・大辞典 [БАС: 2004] の新規の特徴ではない<sup>(13)</sup>。

以上見た点からだけでも、総じて、第 2 版 [БАС: 1991] と新・大辞典 [БАС: 2004] とのあいだに、決定的な違いがあるようには説明されないのである。

**編集主体の同一性** ただ、決定的な違いと言えば、大辞典第 2 版 [БАС: 1991] がモスクワを出版地とし、編集が科学アカデミー・ロシア語研究所であるのに対し、新・大辞典 [БАС: 2004] の出版地がモスクワとサンクト=ペテルブルクの併記となり、編集が同じ科学アカデミーでもペテルブルクの言語学研究所となった点である。言語学研究所はソビエト時代の言語学研究所レニングラード支部の後身 (日本語では同じ「言語学研究所」となるが、ロシア語では、ソビエト時代には Институт языкознания であり、レニングラード支部がソビエト体制解消に際して独立し (サンクト=ペテルブルクと改名したこの都市に) 新設されたものが Институт лингвистических исследований) である。モスクワのロシア語研究所と、ペテルブルクの言語学研究所との対応は、ちょうど文学研究の研究所名が、モスクワでは「世界文学研究所」であり、ペテルブルクが「ロシア文学研究所」であるのと興味深い対照をなしているが、そこに名称そのものが持つような重大な差異があるわけではない。

それよりも、それぞれに辞典の扉裏に列挙された編集スタッフの個人名を比較しておく必要があるだろう。そこで、時間的に近い、大辞典第 2 版 [БАС: 1991] 最終巻、第 5・6 巻合冊 (1994 年刊) と、新・大辞典 [БАС: 2004] の第 1 巻 (2004 年刊) のあいだで編集グループのメンバーを比較してみると、詳細は省略するが、両者は結局同一のグループと断ずるよりほかはない。この点をどのように理解すべきなのかは、わからない。だが少なくとも、かつて大辞典第 1 版 [БАС: 1948] では、出版地としてモスクワとレニングラードが併記されていたことを思い合わせ

れば、人と資料と仕事とがどのように分担されているのかはともかくとして、それ自体ことさらに新奇な事柄ではない。

例えば、学閥とか、財政上の問題とか、言わば楽屋廬的な問題も、学藝史的な視点から興味の持たれることではあっても、現在進行中の問題であってみれば、いまのところは、編輯方針として明示されたものと、その方針に従って編纂された実物とを見て、論じられるところを論じるよりほかに仕方はないのである。

## 2. 新しい1巻物アカデミー辞典の系譜

ボブノーワが次に挙げているのは、セルゲイ・アレクサンドロヴィチ・クズネツォーフ〔С.А. Кузнецов〕編纂の1巻本、ロシア語詳解大辞典〔БТС: 1998〕である。アカデミー大辞典〔БАС: 1948〕〔БАС: 1991〕〔БАС: 2004〕、同じくアカデミー小辞典〔МАС: 1957〕〔МАС: 1981〕（第1版・第2版ともに4巻本。ボブノーワの今回の著書では期間上対象となっておらず、本稿でも前章で触れた以上のことは取扱わない）は、ともに浩瀚な多巻本辞書であり、それに対して、ソビエト期を通じて、唯一扱いやすい1巻本辞書の役割を果たしてきたのが、オージェゴフ〔С.И. Ожегов〕の辞典〔Ожегов: 1949〕であるが、この辞書については、のちほどまた検討する。

詳解小辞典〔Лопатины: 1990〕これに対して、まったく新しいロシア語詳解辞典として、ソビエト時代の末に発行されたものに、ロパーチン、ロパーチナ〔В.В. Лопатин, Л.Е. Лопатина〕共編で、ロシア語辞典小文庫〔Малая библиотека словарей русского языка〕の1冊として刊行された、ロシア語詳解小辞典〔Лопатины: 1990〕があり、初版は1990年であるが、21世紀に入っのちも改訂を重ねている。しかし、ボブノーワの著書には一切触れられていない。そこで、クズネツォーフの詳解大辞典〔БТС: 1998〕について見るまえに、この詳解小辞典について概観しておく。

この辞書は、オージェゴフの辞典〔Ожегов: 1949〕初版以来、じつに40年ぶりに出された、まったく新しい1巻本のロシア語辞典である。オージェゴフの辞典〔Ожегов: 1949〕と同じ、モスクワの〈ロシア語〉〔«Русский язык»〕出版所の刊行であり、序文によって見ても、採録される語彙構成がオージェゴフの辞典に準拠していることが明らかにされて、頁を開いてみて受ける第一印象もオージェゴフの辞典に近い。実際に使用してみると、用例にセンテンスを構成しているものが少なく、句単位にとどまる点はオージェゴフと同様だが、語義解説が比較的丁寧でこなれており、収録語数が3万5千とオージェゴフ辞典（初版で5万、第9版で5万7千）に比すれば少ないものの、小説等を読む際にも充分役に立つ、使いやすい辞書である。

なお、序文<sup>11</sup>によると、語義解説にはこの辞書に収録されている語彙だけを用いた、としており、言うは易く行なうはかなり困難であろうこの方針によって、語義解説に感じられる丁寧さが保証されているのであろうことが推察される。

この辞書〔Лопатины: 1990〕は、先に触れたとおり、〈ロシア語〉〔«Русский язык»〕出版所の

ロシア語辞典小文庫の第一弾として発行されており、この辞書の収録項目、語義分け等を基準として、各種の辞典（用法・文法辞典、力点・発音辞典等）を刊行するほか、新語辞典、外来語辞典、同義語・反義語辞典、各種成句辞典、語源辞典等々の刊行を予定していた。この文庫（叢書）の企画は、その後「小」〔малый〕を取り去ってロシア語辞典文庫〔Библиотека словарей русского языка〕の名称となり、そのなかでロパーチン、ロパーチナの辞典も1994年に第3版改訂版、2001年には第7版改訂版を出している（この辞典のタイトルも「小」ではなく、ロシア語詳解辞典となった）<sup>(15)</sup>。さらに2004年になると、モスクワの科学アカデミー・ロシア語研究所の編纂物であることを謳い、再度書名も現代ロシア語詳解辞典〔Лопатины: 2004〕と変え、その後も版を重ねている<sup>(16)</sup>。

詳解大辞典〔БТС: 1998〕 さて、クズネツォーフの詳解大辞典〔БТС: 1998〕は、厳密には20世紀中の刊行ということになるのだが、ボブノーワの著書では、アカデミー辞典の系譜に直接連なるものとして、新・大辞典〔БАС: 2004〕の次にこの辞典を扱っている。

そもそも、この種の参考図書のタイトルに「大」〔большой〕「小」〔малый; краткий〕といった語が付されていても、実際を見ると困惑させられるケースが多々ある<sup>(17)</sup>。タイトルのうえから言えばクズネツォーフの「大辞典」も、アカデミー「大辞典」も変わらないことになるわけであるが、もちろん、全20巻の大辞典と1巻本の大辞典とでは、その規模はまるきり異なる。とは言え、クズネツォーフのこの大辞典は、1巻本として、その外形から言っても、また内容の持つ情報量から言っても、オージェゴフの辞典〔Ожегов: 1949〕（ならびにロパーチンの詳解小辞典〔Лопатины: 1991〕）とは比較にならないほど「大きい」。

代表的な国語辞典としてのオージェゴフ辞典は、実を言うと、詳解辞典とは呼びにくいもので、その語義解説は、詳解と言うよりは——極端に言う——複数の同義語による言い換えを示していると言うに近い。また、用例には例文としてセンテンスを構成しているものがほとんどなく句単位にとどまっていた、それも定用される語結合や成句の範囲に入るものが多い。これに対して、クズネツォーフの詳解大辞典〔БТС: 1998〕は、語義の解説に詳しく、用例も——限られた項目においては——センテンスを構成しているものを掲げている。しかも、収録語数は13万5千に及び、なんと、アカデミー大辞典・第2版〔БАС: 1991〕と同数である。たしかにこの点でも、まさに1巻本で実現した「大辞典」と言うことができる。

したがって、1冊本とは言え、相当の情報量を収めている。上述のように、外形上で見ても、分厚さは一級品で（判型は、この種の辞書としては標準的なものであるが、もちろん、他国のものと較べればやはり大きい）、しかも用紙の薄いことは、それまでのロシアでは考えられなかったもので、これによってはじめて1534頁という頁数を確保している。薄い用紙はたしかに画期的なものだが、日本の辞書用紙などと較べては、依然良質のものとは言え、薄さゆえに裏側の文字が透けて見え、おまけに平滑を保てずに波を打ち、お世辞にも扱いやすいとは言えない。さ

らに、何よりもこの辞書を使いにくいものにしているのは、文字の細かさと行間の狭さとであろう。

語義説明の丁寧さと、用例を適度に含んでいる点で、1巻本としては画期的で使い出はあるものの、重厚に過ぎる。もっとも、この重さを支える造本はしっかりしたもので、革装を模した表紙は頼りがいがある。

**言語辞典と百科事典** ところで、この表紙に関連するのであるが、辞書編纂の根本方針に関わる興味深い事実がボブノーワの解説に記されている<sup>18)</sup>。すなわち、この辞書は、当初（1990年）語義解説に百科事典的な情報を盛り込むのみではなく、百科項目を見出しに立てた、ロシア語詳解・百科事典として企画されながら、財政上の理由から（年代から考えると、まさしく多くの学術出版が直面した問題のゆえに）中断し、1993年からは伝統的なアカデミー辞典編纂の枠組みに戻って編纂が行なわれた、と言うのである。

（アカデミー辞典編纂の枠組みに戻って、という意味は、一つには、この辞書の編纂が、アカデミー大辞典〔БАС: 1948〕〔БАС: 1991〕〔БАС: 2004〕、アカデミー小辞典〔МАС: 1957〕〔МАС: 1981〕と同じグループによって<sup>19)</sup>、同じカード資料を用い、同一のプリンシプルをもって行なわれているということでもある）。

ここで、アカデミー辞書編纂の一つの問題に触れておかななくてはならない。それは、辞書項目として、百科項目を採るか否かということである。かつて拙論<sup>20)</sup>においても述べたことであるが、ロシアのアカデミー辞典では、伝統的に百科項目を採録しておらず、その点、例えば、日本の広辞苑などに見られる特徴とは大きく異なるところを持っている。

少し考えてみれば誰にも想像のつくところであるが、一般語彙項目と百科項目とのあいだに厳密な区別を設けることは難しく、百科項目のごく一部が、時代とともに一般語彙化する現象が恒常的に起こっているものとするのが常識的なところであろうが<sup>21)</sup>、クズネツォーフの詳解大辞典〔БТС: 1998〕の当初の企画は、あたかもソビエト体制の解体と同時に、このアカデミー辞典の編纂方針の枠から大きく一步を踏み出したものと言える。結局、1998年に至って刊行された実際の辞典には百科項目は含まれず、一般語彙項目の語義説明に百科的情報を入れているのみだとされている<sup>22)</sup>。

ところで、ここで指摘しておかななくてはならないのは——ボブノーワは触れてはいないのだが——このクズネツォーフの詳解大辞典〔БТС: 1998〕にはペアとなる百科事典版が存在していることである。

それは、ブローホロフ編輯の大百科事典<sup>23)</sup>で、クズネツォーフの詳解大辞典〔БТС: 1998〕刊行の前年——1997年の刊行である。これが何故クズネツォーフの詳解大辞典とペアであるかと言えば、それは、この2冊が色遣いをまったく逆にしながら、すっかり同じ装訂となっているからである。表紙のデザイン、造りはもちろん、文字の組みなどもよく似ており、本文用紙の質も同



等、1456頁という総頁数も近いために、厚さもほぼ同じなのである。ただし、この大百科事典は初版ではなく、第2版改訂増補版となっており、初版<sup>(22)</sup>はソビエト連邦解体の1991年（ただし、このときは2冊本）の刊行であるが、これは明らかに、1979年に初版の出たのち、1～2年ごとに新しい版の出ていた1巻本のソビエト百科<sup>(25)</sup>の後身にほかならず、プローホロフはじつはこの1979年以来不変の代表編集人なのである。

これまで、この2冊がペアのものとして作られたものであることは、2冊の外形から判断されるのみであったが、今回、ボブノーフの解説によってクズネツォーフの詳解大辞典〔BTC: 1998〕のはじめの企画が知られるに至り、クズネツォーフの辞典が百科事典としての性格を抛棄した分を、プローホロフの事典の改訂版をペアに擬すことによって補ったものと解することが可能であろう。

また、これもボブノーフは触れていないのであるが、おそらくは、クズネツォーフの詳解大辞典〔BTC: 1998〕の、前述のような当初企画に近いと思われるものが、じつは2006年に至って刊行されているのである<sup>(26)</sup>。そのあとがきを見ると、これは編纂の過程で「詳解・百科辞典」〔Толково-энциклопедический словарь (ТЭС)〕という書名（これは、クズネツォーフの詳解大辞典の当初企画時の名称「ロシア語詳解・百科事典」〔Толково-энциклопедический русский словарь (ТЭРС)〕に近い）であったとされており、序文などでもこの書名のままで説明が進められているばかりか、実際、この書名での刊行も行なわれたようである——そのことはともかくとして、この辞典の内容を見ると、一般語彙項目と百科項目との双方を収載しているとは言え、項目となっているのは、日本の広辞苑などとは異なって名詞（すなわち、普通名詞と固有名詞）のみとなっており、その意味では、ボブノーフの著書や本稿が扱うロシア語詳解辞典の枠外にあるものと言わざるを得ない。

現代詳解辞典〔CTC: 2001〕さて、クズネツォーフの詳解大辞典〔BTC: 1998〕の次にボブノーフが扱うのは、同じクズネツォーフの編輯になる現代詳解辞典〔CTC: 2001〕である<sup>(27)</sup>。詳解大辞典をもとに、収録項目を13万5千から9万へと絞り、外形的には厚さをオージェゴフ辞典〔Ожегов: 1949〕並みにコンパクト化する一方、項目数・項目内容はオージェゴフ辞典よりもはるかに豊富であり、詳解大辞典とオージェゴフ辞典の間間的な位置を占める辞書となっている。項目数のうえでも、各項目の含む情報量から見ても、1巻の辞書に盛り込むには過大であったように思われる詳解大辞典〔BTC: 1998〕に較べると、情報量と扱いやすさとのバランスのとれた辞書であると言える。

文字には細身の書体を用いて収録できる情報容量を確保したうえで、語義説明については、単語によって丁寧に説明を行なう項目と、同義語による単純な言換えで済ませる項目とを峻別することによって、限られた容量の効率的な利用を図っている。一方で、語源ならびに外来語の由来表記には力を入れており、文体標示にも積極的で、その点でもオージェゴフ辞典〔Ожегов: 1949〕

初期の全般的なそっけなさとは異なった印象を与える。

以上のように、ソビエト期の末年以来、それまで事実のうえでオージェゴフ辞典〔Ожегов: 1949〕が唯一であったロシア語 1 巻本辞典に、新たに 2 つの流れが生じ、その中で、大〔БТС: 1998〕、中〔СТС: 2001〕、小〔Лопатины: 1990〕の 3 種の辞書が並立したことになる。

### 3. 従来辞書の継承とその迷走

前章で見たのは、アカデミーの伝統のうえに立ちながらも、ソビエト期末年以降に新規に編まれた 1 巻本辞典であった。一方、これらとは別に、ソビエト期に刊行された詳解辞典を継承し改訂するかたちで、いくつかの注目すべき 1 巻本辞典が刊行されている。しかし、なぜかその継承の流れは、一部に不可思議な経過を見せている。

**オージェゴフ辞典の継承** 第一に検討すべきは、これまでも何度か触れてきたオージェゴフ辞典〔Ожегов: 1949〕のその後の運命である。1949年に初版の出たこの辞書は、ソビエト時代に 23 版を重ねている。版を重ねるにつれ、収録語数も漸次増加し、内容の改訂も進められているが、23 版のうち、内容に変更の加えられた版は、第 2 版（1952 年）、第 4 版（1960 年）、第 9 版（1972 年）、第 13 版（1981 年）、第 16 版（1984 年）、第 21 版（1989 年）、第 23 版（1991 年）であり、その他の版は、それぞれに先行する版と内容の変わらない〈ステレオタイプ版〉である<sup>(28)</sup>。

そして、1952 年の第 2 版から編纂・編集グループに加わり、1972 年の第 9 版から編輯名義人となったのが、ナターリア・ユーリエヴナ・シヴェードワ〔Н.Ю. Шведова〕である<sup>(29)</sup>。すでにこの第 9 版において、全面的なデータの見直しが行なわれており、実質上、オージェゴフ、シヴェードワ連名の名義とするにふさわしいものとなっていたわけだが、シヴェードワによってその後も「80 年文法」（シヴェードワが筆頭編輯者）<sup>(30)</sup>などの新しい研究成果が取り入れられるなど、精力的な見直しが行なわれた（オージェゴフによる辞典項目の構造など、基本的な枠組は継承されている）。その結果、オージェゴフ生前最後の改訂版と、第 21 版とを較べれば、内容は完全に刷新されているのだという。

次いで、ソビエト連邦解体翌年の 1992 年、さらに継続されていた仕事の成果が、オージェゴフ、シヴェードワ連名名義の辞書として刊行された〔Ожегов, Шведова: 1992〕（なお、連名名義による刊行は、科学アカデミーの慫慂による）。ここでは、内容的に社会主義イデオロギーの桎梏を逃れ、項目のうえでは、宗教に関する項目や、民族名に関する項目が見直されたというのであるから——ボブノーワの教科書では前述のように別個の辞書のように扱われてはいるものの——これはポスト・ソビエト時代においてオージェゴフ辞典の正統を継ぐために体裁をあらためたものと理解できる。

このオージェゴフ、シヴェードワの辞書も、1990 年代中は順調に改訂を重ね、1994 年には第 2 版（800 語の増加）、1997 年には第 4 版増補版を出し、項目数は 8 万語に達している。

さて、不可思議なのは、それ以降、21世紀に入ってからである——21世紀を扱うはずのボブノワはこの件に触れていない——以下、断片的な情報にとどまらざるを得ない。

2007年、モスクワのロシア科学アカデミー・ロシア語研究所から（出版社は〈アズブコヴニク〉〔«Азбуковник»〕）、「単語起源情報を含む詳解ロシア語辞典」〔Шведова: 2007〕が刊行された。タイトル頁には、責任編輯者としてシヴェードワ一人の名前が記され、ここで初めてオージェゴフの名が消えている。

収録語数は8万2千、オージェゴフ、シヴェードワの連名辞典〔Ожегов, Шведова: 1992〕第4版（1997年、8万語）に較べても、新語の採録の多さが目立つが、この辞典の最大の目玉は——書名にもあるように——狭義の語源をも含めた単語起源情報をふんだんに盛り込んだことである〔一つ好例を挙げれば、ДИЖДЕЙ (DJ)〕の項目には、「英語の disk jockey の頭文字から」と誌している。なお、この語は上記の1997年の版には収録されていない<sup>〔51〕</sup>。

こうして、シヴェードワが実質的に編集を続けていた辞典から、永らく残っていたオージェゴフの名義が消えた一方で、別途に、もう一つのオージェゴフ辞典が現われている〔Ожегов, Скворцов: 2009〕。こちらは、オージェゴフ辞典の第26版改訂版を名乗り（当然、第24版、第25版が先行するが、残念ながら未見）、編輯者はスクヴォルツォーフ〔А.И. Скворцов〕である。出版はモスクワ、〈オニクス〉〔«Оникс»〕、〈世界と教育〉〔«Мир и Образование»〕社の共同で、収録項目に大辞典並みの10万を謳っている点が注目される。

序文では、オージェゴフの初版発行以前からの経緯を長々と説き（もっとも、シヴェードワ参加以後の改訂の歴史と、この新版の成立の事情には何ら触れられていない）、タイトル頁裏にはオージェゴフ初版から始めて、オージェゴフの遺産継承者までを含んだコピーライト標示をずらりと並べ、さらには、表紙と背にオージェゴフの肖像写真までを貼り込み、あまつさえタイトル頁の著者名には最初の文字〔О（オー）〕にアクセント記号を打つという特殊なことまで行なつて<sup>〔52〕</sup>、あたかもこちらこそがオージェゴフ辞典の正統な継承・発展であることを主張しているかのようである<sup>〔53〕</sup>。

**ウシャコフ辞典の継承** オージェゴフの辞典〔Ожегов: 1949〕は、もともとウシャコフの辞典〔Ушаков: 1934〕の編纂作業のなかから生まれ来たものであり、そのウシャコフの辞典はアカデミー大辞典の編纂事業のなかから生まれたものである。

ウシャコフ辞典は、その後同じ4巻本のアカデミー小辞典〔МАС: 1957〕〔МАС: 1981〕の刊行されたのちも、語義解説に定評のある辞典としてその価値を失わなかったのだが、完結後半世紀以上、再版も改訂もなされて来なかった。それが、2005年に至って——驚くべきことに——その辞書の改訂版——と言うより——〈現代〉版が刊行された〔Ушаков: 2005〕。原版ですら編輯者扱いだったウシャコフ（1942年歿）を、著者扱いとして、背表紙にも大書している。

この辞書は、ウシャコフ辞典〔Ушаков: 1934〕の語彙収録上の原則を保持しながらも、現代

ロシア語語彙を現在まで最大の18万語収録したもので、あくまでウシャコフ辞典の全面改訂版であることが強調されている。内容的な特徴は、もちろん、時代にに応じたブラッシュアップと、政治的・イデオロギー的要素の払拭とに見ることができる。だが、とくに驚かされるのは、もともと原版全4巻の内容を、1巻1240頁にまとめたことで、ちょっと違かには信じがたいほどである<sup>34)</sup>。

最後に、2006年に出たもう一つのロシア語詳解辞典に触れておかななくてはならない。それは、タチャーナ・フォードロヴナ・エフレーモワ〔Т.Ф. Ефремова〕の現代ロシア語詳解辞典（全3巻）である<sup>35)</sup>。合計3302頁に及ぶこの浩瀚な辞典は、収録項目約16万を誇るものであり、見出し語のあと、文法項目、語義解説、文体標示を並べるうえにおいては、ロシア語詳解辞典の条件を満たしているものと言える。とくに、語義解説については、例えば、形容詞の項目において、関係形容詞としての語義と性質形容詞としての語義とを峻別するなど、語義分けとその解説に力を入れているようであるが、一方で、用例を一切収録していないのである。この辞書もアカデミー大辞典編纂事業の一環として編まれたものであるが、用例をまったく示さないこのような辞書が、実用上、また語彙研究上、どれほどの意義を持ちうるものか一考を要するだろう。むしろこの辞書は、実験的、コーパス的な性質の強いものであるように思われる。

### おわりに

以上、概観してきたように、遡れば18世紀末以来、2世紀にわたって培われてきたアカデミー辞書編纂事業は、ソビエト連邦解体以後も継承され、多様な発展を見せている。ただ、多様と言うなかには、本稿では敢えて詳しく検討しなかったが、財政上の問題、著作権継承の事情、それに商業主義などが絡んで、いかにも自由主義経済下らしいと言え言える様相が現われていることもたしかである。

## ИЗДАНИЯ ТОЛКОВЫХ СЛОВАРЕЙ РУССКОГО ЯЗЫКА

(середины XX – начала XXI века)

このリストは、本文中で検討した順に沿いつつも、辞書編纂の系譜を読み取りやすいように配列している。

なお、各辞書の書誌事項詳細（改訂版情報を含む）は、註(3)の参考図書目録（Web版）を参照されたい。

〔BAS: 1948〕 Словарь современного русского литературного языка. М.; Л., 1948–1965.

〔BAS: 1991〕 Словарь современного русского литературного языка. 2-е изд. М., 1991–[1994].

〔BAS: 2004〕 Большой академический словарь русского языка. М.; СПб., 2004–.

〔MAC: 1957〕 Словарь русского языка. М., 1957–1961.

〔MAC: 1981〕 Словарь русского языка. 2-е изд. М., 1981–1984.

[BTC: 1998] Большой толковый словарь русского языка. СПб., 1998.

[СТС: 2001] Современный толковый словарь русского языка. СПб., 2001.

[Лопатины: 1990] Лопатин В.В., Лопатина Л.Е. Малый толковый словарь русского языка. М., 1990.

[Лопатины: 2004] Лопатин В.В., Лопатина Л.Е. Толковый словарь современного русского языка. М., 2004.

[Ожегов: 1949] Ожегов С.И. Словарь русского языка. М., 1949.

[Ожегов, Шведова: 1992] Ожегов С.И., Шведова Н.Ю. Толковый словарь русского языка. М., 1992.

[Шведова: 2007] Толковый словарь русского языка с включением сведений о происхождении слов. М., 2007.

[Ожегов, Скворцов: 2009] Ожегов С.И. Толковый словарь русского языка. 26-е изд. М., 2009.

[Ушаков: 1934] Толковый словарь русского языка / Под ред. Д.Н. Ушакова. М., 1934–1940.

[Ушаков: 2005] Ушаков Д.Н. Большой толковый словарь современного русского языка. М., 2005.

## 註

- (1) Бобунова М.А. Русская лексикография XXI века: Учеб. пособие. М.: Флинта; Наука, 2009. タイトルページの表記では2009年の刊行であるが、実際には2008年末の刊行（巻末の刊行データ中の印刷許可日付は2008年9月3日）。
- (2) 近年で最も詳しいものは История русской лексикографии / Отв. ред. Ф.П. Сороколетов; РАН. ИЛИ. СПб.: Наука, 2001である。ボブノワの著書巻末に文献表があるが、そこに含まれないものとして、それぞれ少しずつ性質が異なるが、以下のようなものがある。Словари и лингвострановеденис: Сб. статей / Под ред. Е.М. Верещагина. М.: Рус. яз., 1982; Сергеев В.Н. Словари — наши друзья и помощники. М.: Просвещение, 1984; Потиха З.А., Розенталь Д.Э. Лингвистические словари и работа с ними в школе: Пособие для учителя. М.: Просвещение, 1987; Будагов Р.А. Толковые словари в национальной культуре народов. М.: Изд-во МГУ, 1989; Протченко И.Ф. Словари русского языка: Краткий очерк / РОУ. 2-е изд., испр. и доп. М.: Изд-во РОУ, 1996.
- (3) 本稿著者（源）は、この目次立てに類似した分類による、ロシア語辞書の書誌を編纂してきた経緯がある一源 貴志「ロシア語ロシア文学参考図書目録稿 1986年度版」1986年5月。「ロシア語ロシア文学参考図書目録稿\_増補 1986年度版（人名索引・正誤訂正・新刊・補遺）」1986年10月。以後、最新版は Web 上にて公表：<http://www13.ocn.ne.jp/~minamoto/Spravoch/Spravoch.html>
- (4) 「ロシア語の辞書」（「窓」別冊）ナウカ 1980年3月。
- (5) 源 貴志『ロシア・アカデミー辞書編纂史における「シソーラス」の思想—「規範」か「総体」か—』『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第50輯第2分冊 125–136頁 2005年2月。

- (6) Бобунова М.А. Русская лексикография XXI века. С. 8.
- (7) Академія大辞典第1版の発行開始年度は、書誌上はこのように1948年度とするものが多いが、実際に見られる第1巻のほとんどが1950年の刊行である。
- (8) Бобунова М.А. Русская лексикография XXI века. С. 9.
- (9) Большой академический словарь русского языка. Т. 1. М.: СПб., 2004. С. 4.
- (10) Бобунова М.А. Русская лексикография XXI века. С. 9-10.
- (11) 源 貴志『ロシア・アカデミー辞書編纂史における「シソーラス」の思想』2005年2月。
- (12) これは、新・大辞典「БАС: 2004」第1巻序文からボブノワが引いているもの。
- (13) 辞典への初収録の記事を載せて、文学作品等の印刷物への初出まで記載はしないのが、ロシア語アカデミー大辞典の、OEDとは大きく異なる点である。
- (14) Малый толковый словарь русского языка. М., 1990. С. 7.
- (15) «Малый толковый словарь русского языка» から、第3版で «Русский толковый словарь» という単純なものに変更された。
- (16) この辞書は2008年にも刊行されており、内容的には2004年版と同様のものと思われる。しかし、タイトル頁には、従来の慣習に則った「第2版ステレオタイプ版」[Издание второе, стереотипное]のような表記がなく、タイトル頁だけ見れば新しい辞書の初版のように見える。この点も、近年の辞書出版の〈迷走〉ぶりを表わすもののように思われる。
- (17) その最たる例が、ソビエト期最大の、文学小事典であろう。Краткая литературная энциклопедия[: В 9 т.] / Гл. ред. А.А. Сурков. М.: СЭ, 1962-1978.
- (18) Бобунова М.А. Русская лексикография XXI века. С. 12-13.
- (19) ちなみに、この詳解大辞典「БТС: 1998」は新・大辞典「БАС: 2004」と同じくベテルブルクの言語学研究所の編輯で、版元はベテルブルクの「ノリント」[«Норинт»] 出版社である。編輯スタッフを比較すると、やはり同一のメンバーが複数存在する。
- (20) 源 貴志『ロシア・アカデミー辞書編纂史における「シソーラス」の思想』2005年2月。
- (21) ソビエト期にこの問題を扱ったものには、例えば、ミンスクで発行された Киселевский Л.И. Языки и метаязыки энциклопедии и толковых словарей. Минск: БГУ, 1977がある。
- (22) Бобунова М.А. Русская лексикография XXI века. С. 13. しかし、実際に採録されたものを見ると、ボブノワも例を引く、「合気道」[айкидо]の語は、じつは新・大辞典「БАС: 2004」にも採られておらず、一冊本ながら13万5千の語彙数を誇るクズネツォーフの詳解大辞典「БТС: 1998」は、やはり百科项目的な語彙を多く採る方向性を持つものである。
- (23) Большой энциклопедический словарь. 2-е изд., перераб. и доп. / Гл. ред. А.М. Прохоров. М.: БРЭ; СПб.: Норинт, 1997.
- (24) Большой энциклопедический словарь[: В 2 кн.] / Гл. ред. А.М. Прохоров. М.: СЭ, 1991.
- (25) Советский энциклопедический словарь / Науч.-ред. совет: А.М. Прохоров и др. М.: СЭ, 1979.
- (26) Первый толковый БЭС: Более 120 тысяч словарных статей: Более 147 тысяч толкуемых единиц. СПб.: Норинт; М.: РИПОЛ классик, 2006. 本文にも記すとおり、「Толково-энциклопедический словарь」の書名でも発行されており、2008年にもまた、少しずつ異同のある書名で2種の刊行物が出ているようであるが、未見。
- (27) さきにロパーチンの現代ロシア語詳解辞典「Лопатин: 2004」について見たように、この辞書も、2007年にもう一度刊行されており、内容的には2001年版と同様のものと思われるにもかかわらず、版次についての表記がない。
- (28) Ожегов, Шведова: 1992 第4版(1997年)の序文中に見られるシヴェードワ自身の説明は正確ではないようである(第4版の改訂に触れておらず、また、1989年の第21版を最終の変更版のように記しているが、1991年に第23版訂正版が出ている)。

- (29) 本稿執筆中(2009年9月18日)、シヴェードワ女史の訃報に接した。享年92歳。
- (30) Русская грамматика: В 2 т. / Редкол.: Н.Ю. Шведова и др. М.: Наука, 1980.
- (31) この新しくなった辞典によって、連名の辞典〔Ожегов, Шведова: 1992〕の役割は当然終わったはずであるが、新しい辞典〔Шведова: 2007〕と同じ2007年に再版が出ている。年初に出たものなので、新辞典が出る前の最後の需要に応えたものとも見られるが、おかしなことに、版次が1997年版と同じく「第4版改訂版」とされている。内容は1997年版と同じであり(じつはさらに2003年にも同様の版が出ているので)、本来「第6版ステレオタイプ版」などとすべきはずであるが、註(16)や(27)にも見るように、この種の慣習が崩れつつあることが懸念される。
- (32) かつて、オージェゴフの姓のアクセントがどこにあるのか、日本でも問題であったことがある(オジョーゴフ〔Ожегов〕説)。森安達也『オジェゴフ「ロシア語辞典」』(「ロシア語の辞書」(「窓」別冊)ナウカ 1980年3月 所収)を参照。
- (33) じつは、オージェゴフ、シヴェードワ連名辞典の出版社とオージェゴフの遺族とのあいだで著作権問題が法廷で争われた。スクヴォルツォーフの辞典は、「第24版」として2003年に、オージェゴフ生前(シヴェードワ以前)の版への回帰と現代化を謳って刊行され、再版を繰り返しているが評判が悪く、2006年の「第25版」を経て、「第26版」の大幅改訂に至ったもののようである。
- (34) 本稿執筆中、先行する2004年版のあることを知った。2005年版とは装訂・体裁はそっくり(ただし色違い)だが、収録語数は11万語、書名も編集者グループも異なるという不思議な本である。
- (35) Ефремова Т.Ф. Современный толковый словарь русского языка: В 3 т.: Ок. 160000 слов. М.: Астрель; АСТ, 2006. 著作権標示は2005年。